

Comprehensive Analyses of Masticatory Function in Maxillectomy Patients with Functioning Removable Prostheses: A Retrospective Cross-Sectional Study

河崎, 雅弘

<https://hdl.handle.net/2324/7182393>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (歯学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : Creative Commons Attribution 4.0 International



氏 名	河崎 雅弘			
論 文 名	Comprehensive Analyses of Masticatory Function in Maxillectomy Patients with Functioning Removable Prostheses: A Retrospective Cross-Sectional Study (上顎顎義歯装着患者の咀嚼機能に関する包括的分析：後ろ向き横断研究)			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	築山 能大
	副 査	九州大学	教授	和田 尚久
	副 査	九州大学	教授	柏崎 晴彦

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

良性または悪性腫瘍に対する上顎切除は、構造や機能の変化および精神的苦痛をもたらす。咀嚼、嚥下、発音などの口腔機能の回復には、外科的再建や補綴装置によるリハビリテーションが選択されるが、上顎顎欠損患者において、残存歯数や咬合支持数、咬合力や舌圧が咀嚼機能と関連していることが示唆されている。また、上顎顎欠損患者では、手術に関連する因子も考慮する必要があるものの、その詳細についてはわかっていない。そこで本研究は、補綴治療を行った上顎切除患者の咀嚼機能を包括的に評価することを目的とした。上顎切除患者 55 例を対象に、年齢、性別、残存歯数、咬合支持数などの患者プロフィールや咀嚼機能を含む口腔機能の測定値、腫瘍治療歴をカルテ情報から抽出した。咀嚼機能と患者プロフィールおよびその他の口腔機能との相関、また、腫瘍治療関連因子が咀嚼機能に及ぼす影響等を評価した。さらに、潜在的な予測因子の包括的な同定のため、ステップワイズ条件付きロジスティック回帰分析を行った。

その結果、咀嚼機能の中央値 (138.0 mg/dL) は、口腔機能低下症の概念に基づく閾値 (100.0 mg/dL) よりも高いことがわかった。咀嚼機能は残存歯数、咬合支持数、最大咬合力と中等度の相関、最大舌圧と弱い相関が認められた ($p < 0.01$)。各腫瘍治療関連因子が咀嚼機能に及ぼす影響を 2 群間で比較したところ有意な因子は同定されなかったが、ロジスティック回帰分析でこれらを包括的に検証したところ、咬合支持数が有意な予測因子として同定された。本研究の結果から、上顎顎欠損患者は顎義歯装着によりある程度の咀嚼機能を発揮でき、咀嚼機能に影響を与える因子は顎欠損のない患者と同様であることが分かった。一方、腫瘍治療関連因子との有意な関連は見いだせなかったが、包括的な検証では咬合支持数が有意な予測因子であり、上顎顎欠損患者の特異性が示唆された。

以上の結果から、良性または悪性腫瘍に対する上顎切除症例における外科的再建や補綴装置によるリハビリテーションに関して、咬合支持数が治療効果の予測因子として有用であることが示され、臨床現場に応用可能な新規の知見が示された。よって博士（歯学）の学位授与に値する。